ロノ木ヲ桎トカクト同キコトニテ、煙ノ音ヲカリテ草冠ニ從ヒ、蔫ノ字ヲ用タルトミエタリ、コノ外近年ノ本草ノ末疏ニハ、種々詳ニ載ヲケリ、又嘗テ記ス、唐詩紀ノ内李白ガ詩ニ、相思如煙草、歷亂無冬春ト云リ、相思草ト名クルハ、コレヨリ出ルニヤ、偶然ニ符合セルニヤ、李ガ詩ハ本ヨリ烟ト草トノコトナリ、

〔煙草考〕震軒云、烟草初至于本邦、人不知其正名、只以番名稱焉、鉅儒宿醫、或以爲萇菪、或以爲不然、是非不一、信疑相半、近世漢舶、載來本草詞診、人讀之、初識煙草之名也、其後諸書續至、益知烟草非萇菪也、

〔長崎夜話草五〕長崎土產物

煙草（中略）　此草は、日本の東方にあびりかといふ國あり、此國に一人の美女あり、名を淡婆姑（たんばこ）といふ、國中の男子、此女を戀したふもの甚多かりし、死せし後まで世になつかしむ人多くて、ある時一人の男子、此墓に詣でしに、秋の日早く暮にければ、其儘にて通夜せしに、夜更て甚飢たり、仍そのあたりを探りみれば、草のかうばしきあり、一葉をとりて喰ふに、飢忽ちにやみ、身温かに冷風肌を犯す事なくして、嶂氣を防ぐ事、酒を飲るが如し、此故に南靈草と號し、又は煙酒共いひ、あるひは相思草ともいへり、是より世界萬國に流布す、一度此煙を吸ぬる人は、是を忘れんとてしも忘るゝ事あたはず、相思草の名最なるかな、

〔おほうみのはし〕延寶の帝（元靈）　煙草をよませ給ひける、

蜑のかる藻にはあらねどけぶり草なみゐる人のしほとこそなれ

○按ズルニ、此歌近代世事談（一飲食金絲烟）ニハ、後水尾天皇ノ御製トセリ、

〔雅筵醉狂集戀〕寄烟戀

ねられぬ夜むせぶ思ひにくらぶればきざみたばこのけぶりうす色